2017 年 2 月
1116 号

万葉
Manyoh

一冊の会 編集部
〒160-0015 東京都新宿区大京町５
（一冊の会研究室）

レソト王国から素晴らしい感謝状を頂いて
～佐藤啓太郎大使から深い哲学のお話と共に～

厳しい寒さの中にも春の足音を感じる2月最後の日曜日、26日に尾崎行雄記念財団応接室で櫻華塾が開催されました。冒頭、大槻会長から「レソト王国大使館より感謝状を頂戴しました」との発表があり、嬉しい驚きで会が始まりました。11月24日に開催されたレソト王国国王・王妃陛下の歓迎晩餐会の役員に宛てた懇切丁寧な感謝状が、レソト王国大使館ヤンガネ臨時大使から届いたそうです。英文と日本語訳、大使館の印鑑も押印された立派な感謝状が、佐藤啓太郎元大使より授与されました。続いて受賞者よりそれぞれ御礼の言葉があり、中でも赤田さん、城杉さん、山内さんからはご夫妻での受賞にひとしおの喜びが溢れておりました。感謝状の日本語訳を読み上げてくださった佐藤大使は、他のご予定を変更してご出席いただいたとのことで、大要次のような意義深いお話がありました。

今回のレソト国王・王妃陛下の歓迎晩餐会は、大変華やかで、品のある良い会であった。アフリカには、モロッコ、レソト、スワジランドという三つの王国があるが、その中でレソトのレツィエ３世国王陛下が率いるパソト族は結束力があり、1961 年南アフリカ共和国が独立する時、その支配下になるのを潔しとせず、先ず英国の植民地となる道を選び、その後 1966 年にレソト王国として建国を果たし日本と外交関係を結んだ。”天空の王国”と言われ国土の平均が海抜 1300 メートルである遠く離れた国の国王が「日本に行きたい」と言われそれを実現されたことは、日本人として本当に嬉しく有り難いことであった。その気持ちがあの会場には溢れていて、レソトの国歌斉唱、日本の文化である舞踊や美味しい食事を、心から楽しまれたことと思う。それは特に阿波踊り、王妃陛下のお体がリズムに合わせて揺れていて、アフリカの人々の見事なリズム感と響き合っていたのだと思われる。政府では真似のできない暖かい歓迎の催しであった。

世界には様々な民族が存在する。日本には四季があり農耕民族として、春に種を蒔き秋の実りの取入れの時期には住民が共同で作業をするなど、時間を守る習慣や季節の移り変わりで感性が鋭く、はかなさを感じるなど哲学的な人間性が形成される。タンザニアもエチオピアもアフリカの国々は天候に恵まれ２期作、３期作が普通で、アジアのマレーシアもそうだが、稲作ならいつも新米が食べられる。農耕が発達する以前は狩猟や木の実などが食料確保の手段だったから大地を駆け巡って体力を鍛え筋骨隆々たるスポーツ選手を生み出している。天候や地形で様々な民族、人間が創られるのであって、「秋来ぬと目にはさやかに見得ねども風の音にぞ……」という感覚を理解してくれる外国人は居ない。教養の有る無しではない。

何年前だったか、ロンドンからザンビアに夜間のフライトで向かっている時、地上にナイル川が見えた。ふっと４万年前、アフリカの住民がヨーロッパ、即ちギリシャ方面を目指して北上した頃、途上どんな苦労があっただろうかと考えた思い出がある。いろいろな出会いが偶然か、定められた必然か？偶然だと思っていたことが、何十年か後に振り返ると必然だったと思うようなこともあるのではないか。

佐藤大使はアフリカに出会い、愛し、尽くした日々を振り返られているような感慨深いご様子で、民族や宗教の違いを認めつつ理解し合おう、血では分かり合えなくても仲良く出来ればいいなあと思う、と話を結ばれました。雄大な自然に育まれたアフリカの文化、そしてアフリカから始まった人類の歴史と、横には遥か地

球をめぐる広がり、縦には悠久な時間軸にふれてお話をしてくださり、深い哲学の講演を聞かせて頂いたような感動の時間でした。

現在は、お住いの地域の町内会長として、30、70、72―30 年間に東京直下型地震がある可能性は 70%、公の救済が届くまで 72 時間は自分の力で生き抜かなければならない―ことに注目し、そのための準備を各自がすることが重要だということを地域の人々と共有している、との現実に役立つお話も伺いました。

大槻会長からは３・８国際女性デーに当たって、映画「未来を花束にして」、及びパキスタン映画「娘よ」を鑑賞し勉強するようにお話がありました。また、東日本大震災から間もなく 6 年、地震・津波発生直後から、道なき道を走って支援を続け、これまで 111 回にわたって東北の人々の支援に奔走したこと、海の無いレソト国王・王妃両陛下が被災者の話を直接聞いて同苦の心を持ってくださったこと、これからも一冊の会一人ひとりが率先してレソトの人々との交流、東北復興のために励んでいこうと、いつもの率先垂範の姿を示されました。会長として無事故で一連の行事をやり遂げられたご苦労は、言葉に尽くせぬものだったと感謝でいっぱいになりました。

最後に石田理事長から、尾崎行雄は常に「他国から愛され尊敬される日本にならなければならない」という信念で行動していた。今、〇〇ファーストという言葉が流行っているが、日本人が「日本ファースト」を叫ぶのは当然のことだが、そのために他者を否定する「排外思想」と厳しく戦ってきた。一冊の会のメンバーもその精神を忘れないでほしい。

佐藤大使の貴重なお話に心より感謝申し上げますと挨拶がありました。

春のような晴天温暖な一日、悠久な世界に心が広がるような櫻華塾の集いに一同大満足でした。このような学びの場にもっと多くの友人を誘って参加する努力をしなければと思います。最後に佐藤大使を囲んで記念撮影が行われ、参加者は心の栄養を沢山頂いた感謝で大使をお見送りいたしました。

最後に事務所に届いた感想を抜粋いたします。

スケールが大きく、心が豊かになる貴重な講演に大変感銘を受けました。器とともに、中身も気分を一新し、一層の精進を重ねて参ります。（平間）

先輩方の多大なご尽力、ご助言のおかげで、感謝状を通訳担当の妻ともども頂き、身に余る光栄です。今回、撮影記録担当として、晩餐会、東北視察に同行させて頂きました。写真はレソト王国側にも好評と伺っております。過分な大舞台に参画させて頂き、得た学びを、いつ大舞台が来ても対応できるよう、日々の活動から引き続き精進して参ります。（山内）

前回、１月の櫻華塾にヤンガネ臨時代理大使がわざわざお越しになり、御礼を言われ我々1 人 1 人を「レソト王国の大使」であるとおっしゃって頂いた上に、今回感謝状まで頂き、身に余る光栄です。このまたとない機会と経験を、日本とレソト王国の友好と平和を発展させていくことでお返しができるよう頑張って参ります。（赤田）

長年外交官として勤務されていた佐藤大使の講演で一番胸に響いたのは国際人として、お互い文化、歴史、慣習、感性を認め理解し合うことが一番大事ということです。一冊の会では他を認め、理解し合い、尊重する心を持って真心から持続可能な支援・活動を先輩方が半世紀という永い間行っております。将来に投資頂いた若手として、更に飛躍した未来へと繋げる為に、身を引き締め今後も取り組んで行きたいと強く思いました。（城杉）

大槻会長からレソト王国を大切にするということは相馬先生の意志であること、東北被災地 111 回の支援から赤松先生のお話し、国際女性デーに至るまで多岐に渡ってお話しくださいました。その全てが SDGs に繋がっていると認識し、流れとして捉えることの大切さを改めて感じております。この度、レソト王国ヤンガネ臨時大使のサインが入った感謝状を佐藤大使から直にいただいたことは、何にも代え難い最大の誉れです。レソト王国国王王妃両陛下に訪日の歓迎をお喜びいただき、またこのような感謝状をいただくことが出来たのは、一重に大槻会長、小山副会長の率先垂範、石田理事長のご指導と、先輩方のご尽力の積み重ねがあったからこそです。先輩方の築いてくださった礎に、次の時代を重ねていけるよう精進して参ります。（瀧川）

文責：箱根・三坂・平間　編集：大槻・小山・赤田

※掲載記事、写真等の無断転載及び複写を禁止します。Copyright(C)2017 Issatsu no Kai. All Rights Reserved.